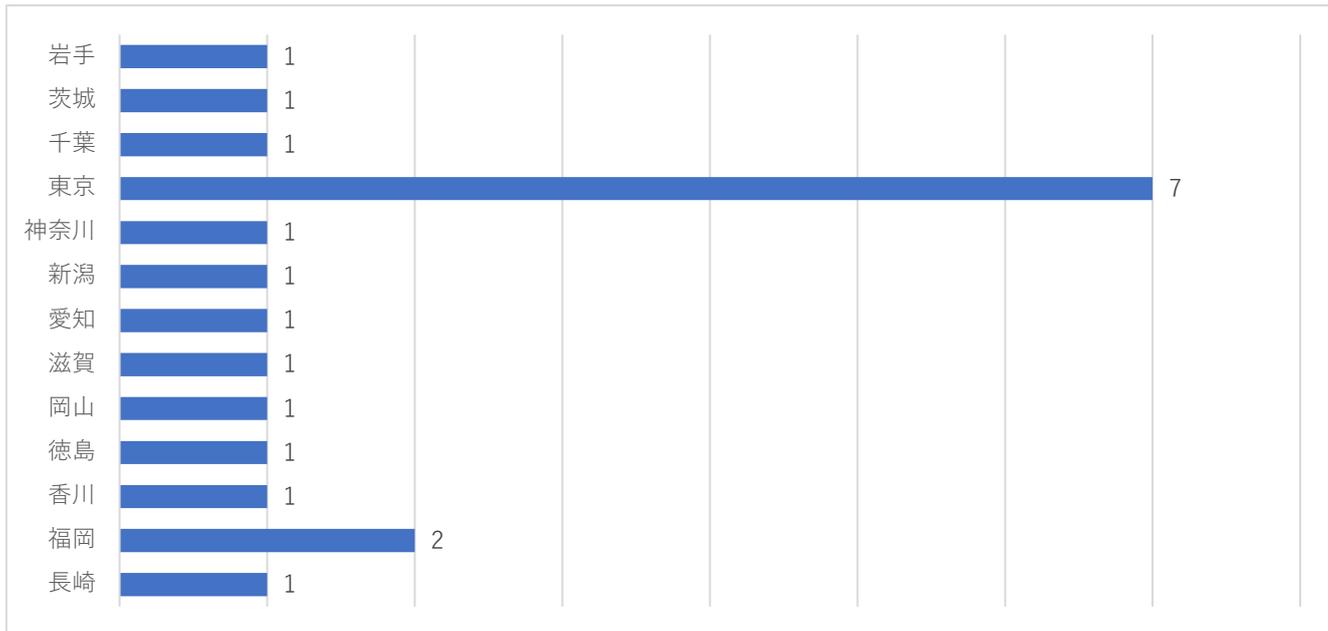


厚生労働大臣指定法人・一般社団法人いのち支える自殺対策推進センター自死遺族等支援室主催
令和5年度自死遺族等支援団体向け研修・意見交換会（1/13）
開催後アンケート結果の概要

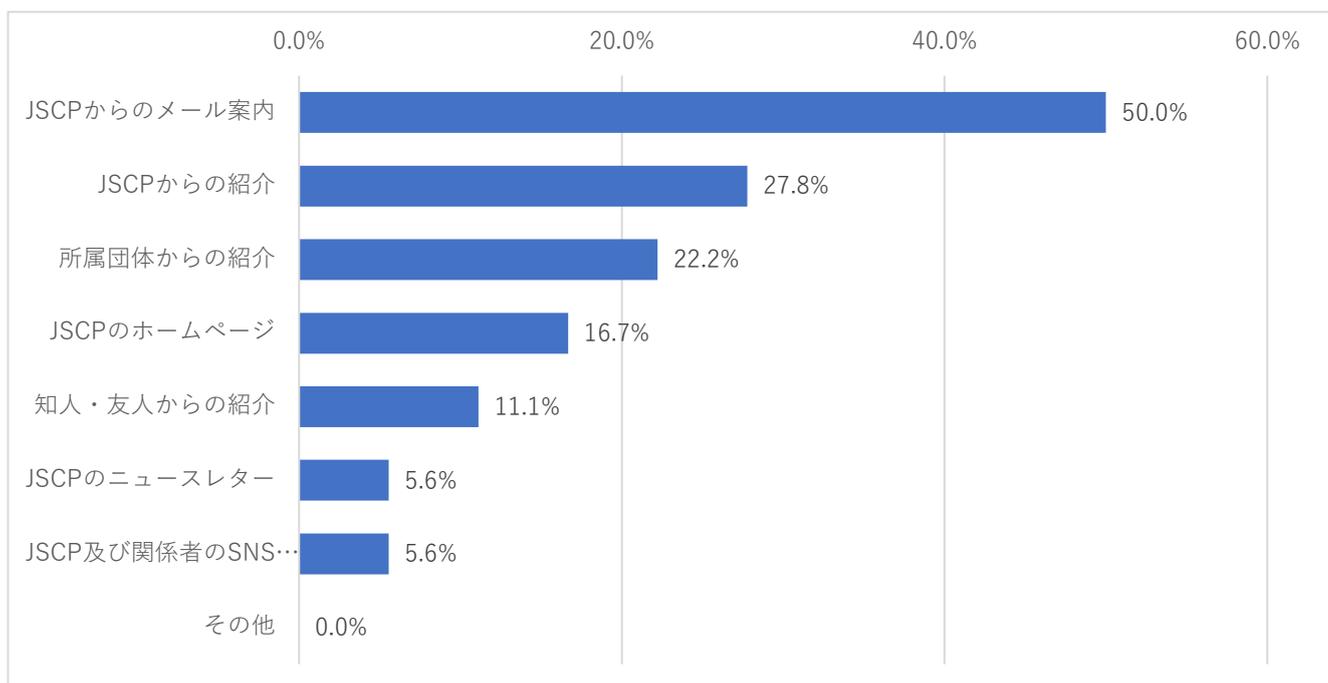
※参加者 20 団体中、アンケートに回答したのは 18 団体。回答率 90%。

1 主な活動拠点（都道府県） N=20



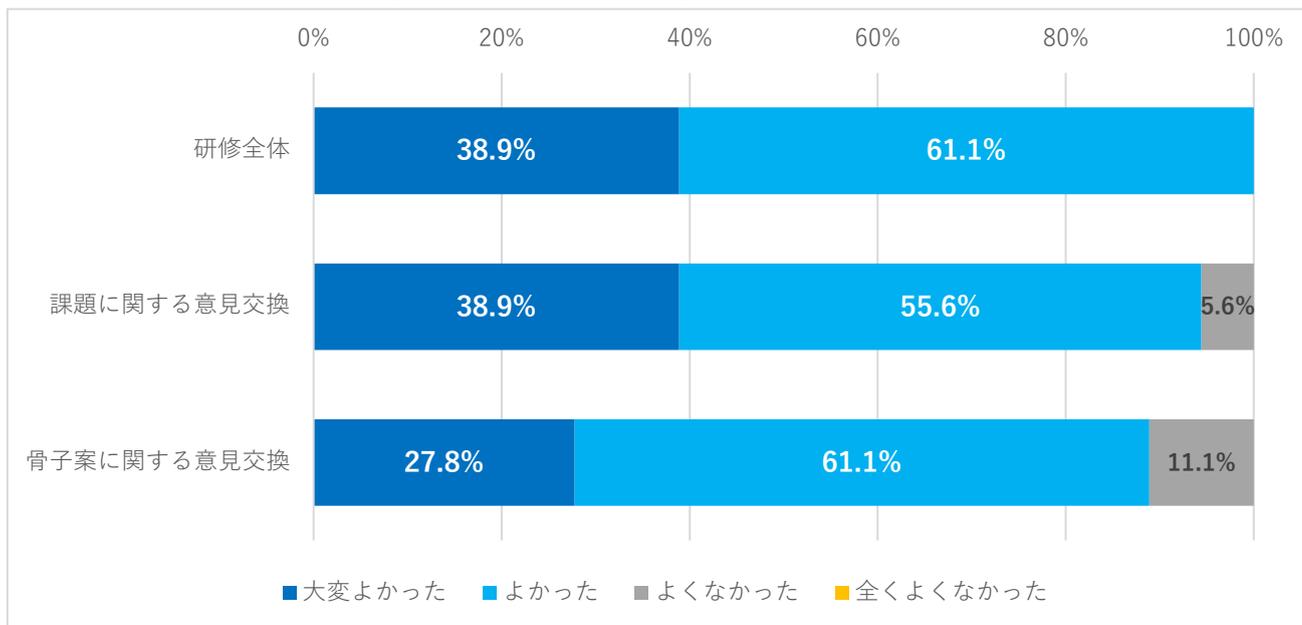
2 本研修を知った理由（複数回答） N=18

本研修を知った理由は、「JSCP からのメール案内」が 50.0%、「JSCP からの紹介」が 27.8%



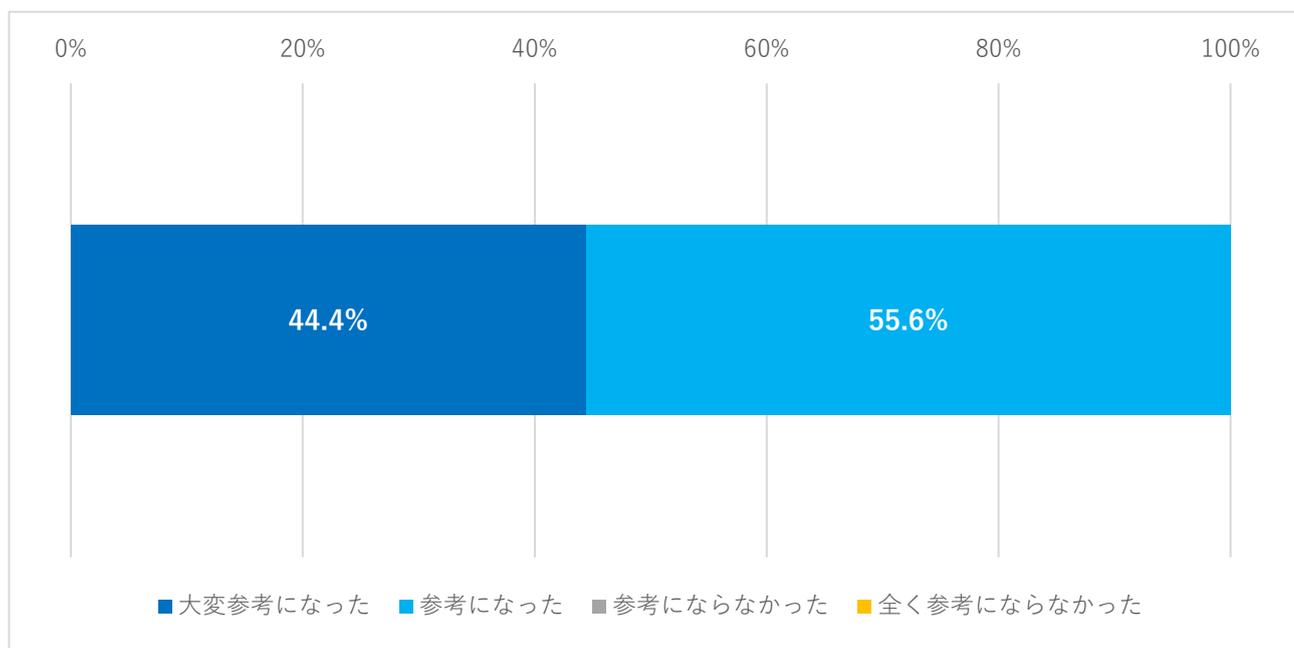
3 研修全体と各プログラムに対する満足度 N=18

研修全体の満足度は、「大変よかった」が38.9%、「よかった」が61.1%



4 今後の活動の参考 N=18

今後の活動の参考は、「大変参考になった」が44.4%、「参考になった」が55.6%



5 本研修・意見交換会の感想や、特に印象に残ったこと・勉強になったこと等（自由記述・抜粋）

- 学校での事件の遺族は、学校との交渉に何年も費やすことから、遺族の集いやわかち合いの場に馴染みがない人も多い。今回の研修を通じて、わかち合いの場などに参加する（子どもを亡くした）親の様子や、わかち合いの場を提供する側が考えていることを少し知ることができて、勉強になった。
- 参加者が来ない回があったとしても、継続して、わかち合いの場を設けておくことで、誰かの支えにつながるという発想がなかったのが、大いなる気付きになった。
- 「指導死」という言葉を初めて知った。
- 時間が短く感じた。交流の機会のための時間をもう少し設けてほしかった（4～5人でのグループ討議があっても良いのでは）。
- 「自死遺族やその支援に関わる人たちは、自分たちから声を上げないと外部に声が届かない状況に置かれているが、それだからこそ、関わる人たちがこうやって声を出していくことが重要」という話が一番心に残り、活動していくモチベーションになった。
- 自治体と民間団体の連携の仕方。経験談を踏まえて語られた「自治体を巻き込むポイント」は活動が行き詰まった際の参考になる。
- 支援団体が従来の対面型・地域密着型のみでなく、オンラインを活用したり、トピック毎に結びついたり（LGBTQなど）している様子を感じることができた。人材育成や世代交代、行政との連携や資金の獲得など、普遍的な課題もあり、解決のためにノウハウを共有したり、一緒に取り組んだりできれば良いと思った。

6 今後、JSCP 自死遺族等支援室で取り上げてほしいテーマや要望（自由記述・抜粋）

- 交流会・人材育成の場の共有、ニーズの把握に資する場の設定。
- わかち合いの会や相談活動にて相談を受けた場合、医療機関や法律家など関係機関へつなぐ際に、つなぎ先の調査確認や連絡・付き添いをどうしているのか。私たちの団体は、悩みを聞き出しながら対処法を整理し、問題解決に向けての行動ができるようになるまで寄り添うというスタンスをとっている。今回の「手引」にも支援先の情報が載っているが、実際の相談にどのように活用しているか、他の団体の事例が知りたい。
- 「自死」という表記をなぜ使用しているのかという歴史的な背景と現況（遺族と接する際に感じていることなど）についての意見交換。
- 「語れない」遺族の心情や状況についてのシェアと意見交換。
- 「LGBTQ+」や「外国人外国籍多言語他文化を持つ方々への対応」「SNS・ネットいじめや誹謗中傷」についても掘り下げて集中的に学ぶ機会ほしい。

7 その他の意見や感想

- 今回の手引改訂をきっかけに、自治体と民間団体が繋がりのある活動にしていきたい。民間団体が相談窓口を作り、人材育成にも力を注いでいくためにもガバナンス作りを行政にお願いしたいと思った。
- 子どもの自殺が起きた時、教育委員会の対応は心ないものがあるが、悪気があるわけではないこともあると思う。教育委員会の関係者が今回のような意見交換会に参加してくれるようになり、遺族感情を無意識に逆撫でするようなことが減らせたなら、子どもの自殺対策として大変ありがたいと思った。
- 思いのある参加者と研修及び意見交換の機会をもらい、こんなにも真摯に向き合っている人たちがいるのだと実感できた。今後に生かしたい。
- 初めて参加し、全国の他の団体の活動状況がよくわかり、一支援者としての視野が広がり、横の繋がりにも大変必要な事と思った。